

作家と文体

—Poe を Anderson と較べる—

藤本正文

I

文は人であるか。文は人ではない。おそらく Poe は、そう思っていたであろうと思う。

Poe は、「本の書き方は支那人がヒントになる」と述べた。“Marginalia”（その1849年）のなかの断章である。支那語は右端から書きはじめて左に移る。頁の綴じ方も逆である。そのように英語を、おしまいから書くのがよい、というのだ¹⁾。「あらかじめ読者の心に残しうる印象を思い定めてから書く」²⁾、という彼の有名な小説理論の、これは彼一流のヴァリエーションにあたる。人は普段、さかさまにものを考えはしない。さかさまに考えることで、思考の方法のみならず、内容が逆転しないという保証はどこにもない。しかしなぜ普段どおりでいけないかと言えば、それは文が、読む人のためのものであるからだ。書く人のものではない。Poe はいつも、そのことを考えていたのであろう。

そのような Poe のために、私はここに、ひとつの小観察を報告しよう。（断じて Poe のために。たとえば、私の文が愚かであって私が愚かである、これとは全く関係のない話である。）この観察を、地下の Poe が喜ぶかどうかは分からない。しかし少なくとも、さほど不興を買う事柄ではなからうと

信ずる。なおこれは弁解のために加えなければならないが、Poe について書こうとすると、何によらず、言葉に慎みがなくなる。Poe の評論の激越無双と言ってよい語り口を思い出し、あの荒技を見習いたくなくなってしまふのである。

II

不便なことに英語にはこれに相当する単語がないけれども、ドイツ人は“*Ohrenmensch*”, *Augenmensch*”, ということを言うようである。前者「耳人間」は聴覚がすぐれ、音感が豊かで、音楽の嗜みをもつ。他方「眼人間」は視角的関心がつよく、形象や色彩の感覚が発達し、絵画を愛するものとされる³⁾。人にこのような2つの類型がありうることは、われわれが自己に照らし、またすこし周辺を見回すとき、さしあたり納得がゆくのではなかろうか。

Poe ならば、まずこの“*Ohrenmensch*” に違いない、と考えるのが常道であろう。舞台俳優として声望の高かった Poe の母親は、また天分のある歌い手でもあったという⁴⁾。幼い Poe と音楽とを結びつける記録は見あたらないように思うが、長じて彼の音声は旋律そのものであった、とのことが報告されている⁵⁾。彼が音楽の愛好者であったことは間違いない。それでなければ彼の物語や論説が、あれほどしばしば音楽を話題にすることはできない。メロディ⁶⁾、リズム⁷⁾、ハーモニー⁸⁾、歌曲⁹⁾、円舞曲¹⁰⁾、交響曲¹¹⁾、リュート¹²⁾、ギター¹³⁾、ハーブ¹⁴⁾、Haydn¹⁵⁾、Mozart¹⁶⁾、Weber¹⁷⁾。

大作曲家への言及は、決して少なすぎるわけではない。おそらくは彼好みのドイツ・ロマン派を聴くするには、彼はあまりに早世をしすぎてしまったのだ。そしてもちろん、評論“*The Poetic Principle*” (1850) から、著名なところが思い出されなければならない。「魂が詩情を宿し、それが求める大目的、天上の美の創造に近づこうとするのは、おそらく何であるよりも、音楽においてである。¹⁸⁾」

さてここで、Sherwood Anderson のことを持ち出してみたい。アメリカ

カ短篇小説，一方の旗頭。一方の，というのはもちろん Anderson こそが，Poe の信奉したプロットの論理や文語文体の伝統を，完腐なきまでに打ち破ってみせた存在であったからだ。しかしここでなお興味深いのは，Anderson がどうやら “Augenmensch” に属するらしい，ということである。

生来 Anderson は，色彩への関心が著しい人であったとされる¹⁹⁾。若い頃から好んで絵を描き，本業にするつもりではなかったものの，絵が或る値段で買われたことがあったという²⁰⁾。作家として名を成してのち，一度は個展が開かれた，とすら記録されている²¹⁾。自伝的な小説 *A Story Teller's Story* (1924) のなかで，彼は文学の師 Gertrude Stein の書物との出会いを，次のように表現している。「私の前に，言葉の群れがあった。ちょうど，画家がテーブルのうえに，パレットを置いたのを前にしたときのような²²⁾」

III

ではこの Poe と Anderson，二人の文体はどうか。文そのものを単純に比較するのには，やはり物語の筋に結びつけない方がよい。その意味で，たとえば町並みの叙景法を見るのは適切であろうかと思う。まず Poe について，ここに印度の Benares 市の情景がある。“A Tale of the Ragged Mountains” (1844) から。

The streets seemed innumerable, and crossed each other irregularly in all directions, but were rather long winding alleys than streets, and absolutely swarmed with inhabitants. The houses were wildly picturesque. On every hand was a wilderness of balconies, of verandahs, of minarets, of shrines, and fantastically carved oriels. Bazaars abounded; and in these were displayed rich wares in infinite variety and profusion—silks, muslins, the most dazzling cutlery, the most magnificent jewels and gems. Besides these things, were seen, on

all sides, banners and palanquins, litters with stately dames close veiled, elephants gorgeously caprisoned, idols grotesquely hewn, drums, banners and gongs, spears, silver and gilded maces. And amid the crowd, and the clamor, and the general intricacy and confusion—amid the million of black and yellow men, turbaned and robed, and of flowing beard, there roamed a countless multitude of holy filleted bulls, while vast legions of the filthy but sacred ape clambered, chattering and shrieking, about the cornices of the mosques, or clung to the minarets and oriels. From the swarming streets to the banks of the river, there descended innumerable flights of steps leading to bathing places, while the river itself seemed to force a passage with difficulty through the vast fleets of deeply-burthened ships that far and wide encumbered its surface.²³⁾

悪名？高い Poe の徹頭徹尾癖が遺憾なく発揮された、これは相当な文章であると言わなければならない。目にとまりうべき事物事象のあくなき列举に添えて、それらの大きさ、形、位置、材質、色彩の特定がある。細密画である。Poe の “The Man of the Crowd” (1840)²⁴⁾ は London 街頭の注視、観察がそのまま一篇を成り立たせているけれども、ここにはその手法が、一挙に集約された形である。

だがこの賑やかな街について、聴覚に関わりのある単語が用いられているのは、後半での下線のもの、わずか3つほどである。一切はたしかに、“clamor” に相違なからうが、その内訳として猿の啼き声のみが挙げられているのは、物足りなくないか。しかもこの場面では、あたかも時間の進行が止められている。なぜなら動詞はすべて、事物の状態や動きの持続、ないし反復を説明するものにすぎない。そうしておいて悠々と空間の描出に耽っている。これはおよそ、時間芸術たる音楽の愛好家にはふさわしくないことである。

片や Anderson といえば、もちろん Winesburg。ただこの Ohio 州の架

空の町は Benares のように繁華ではないから、記述すべきことが少なくなるのはある程度やむをえなからう。だがそれに加えて、そもそもこの作家は、Poe ほどに風景というものを重要視していないふしも窺えるようである。以下は連作集 *Winesburg, Ohio* (1919) のうちの、まず “The Thinker” から、次に “Sophistication” から。

A June moon was in the sky, although in the west a storm threatened, and no street lamps were lighted. In the dim light the figures of the men standing upon the express truck and pitching the boxes in at the doors of the cars were but dimly discernible. Upon the iron railing that protected the station lawn sat other men. Pipes were lighted. Village jokes went back and forth. Away in the distance a train whistled and the men loading the boxes into the cars worked with renewed activity.²⁵⁾

In the streets the people surged up and down like cattle confined in a pen. Buggies and wagons almost filled the narrow thoroughfare. A band played and small boys raced along the sidewalk, diving between the legs of men. Young men with shining red faces walked awkwardly about with girls on their arms. In a room above one of the stores, where a dance was to be held, the fiddlers tuned their instruments. The broken sounds floated down through an open window and out across the murmur of voices and the loud blare of the horns of the band. The medley of sounds got on young Willard's nerves. Everywhere, on all sides, the sense of crowding, moving life closed in about him.²⁶⁾

説明は手短で、要点をのみ押さえようとしている。しかもそれらは人の話し声、遠くの汽笛、街頭の楽団、そのホルン、二階からのヴァイオリン、群

衆のざわめきなど、大方は耳から入るべき事柄である。

一方でとくに視角に直結する表現といえば、2つの文を通じて下線のところくらいであるが、うち“dim”“dimly”が決定的であって、これこそが視角そのものを無力にしてくれる。そして *Winesburg, Ohio* が好んで用いるのが、まさにこうした、ほの暗い舞台なのである。(連作中、町なかの描写が少しまとまった形であらわれるところについてその時刻を列記してみると——上に引用した箇所はのぞく——、晩方²⁷⁾、夜更け²⁸⁾、夜²⁹⁾、夜³⁰⁾、明け方³¹⁾、となる。)また上掲の場面には、時間の要素が含まれている。動きが多いし、とりわけ初めの所ではそうしたいくつかが一時的、非持続的であって、従ってそれらの相互に前後の関係がもたらされるからである。要するに忙しい、と言ってよい。これを絵にすることは、画家にとって至難の課題であろう。

IV

すなわち文は、このようなものではないか。私はここで、当面の論旨に都合のよい例だけを挙げた。ともかくもこれらの例示が可能であることが知られば、はや充分であるだろうからだ。文に作家の、最上の美学がある。美はつまり、見る人の印象だ。その印象に供すべき素材を、彼は宇宙の森羅万象から選りすぐる。それがたまたま彼の内的必然と一致しないのを、さほど驚くには足らない道理ではなからうか。不一致は作家の、いや多少とも文体に主張ある作家の、誇らしい特権でさえあるかもしれない。

文が人であるという、これを言ったのは Comte de Buffon という18世紀中頃のフランス人であったそうだ。感心してはならない。なぜ18世紀まで、これが言われなかったかを考えた方がよい。これを言えるのは、文を本当に面白いと思わない人である。むしろ、人間を面白いがる人だ。文はすなわち文である。透かして見るのは、趣味にすぎまい。

注

- 1) "I cannot help thinking that romance-writers, in general, might, now and then, find their account in taking a hint from the Chinese, who, in spite of building their houses downwards, have still sense enough to *begin their books at the end*." (Italics Poe's) *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed. James A. Harrison (1902; rpt. New York: AMS Press, 1965), XVI, P. 170. なおこの全集を以後 *Works* と略記する。
- 2) "Twice-Told Tales by Nathiel Hawthorne", *Works* XI, p. 108.
- 3) これはテレビの語学講座で小塩節氏が話しておられたように思う。いま調べてみると、これらの合成語は小型の独和辞典には載っていないことが多い。(大辞典にはある。)しかし英語にくらべてドイツ語では、文脈に応じ、よほど自由に合成語的な表現が用いられるようである。従ってこれらはそれほど稀な、特殊な表現なのではないだろうと想像する。
- 4) Arthur Hobson Quinn, *Edgar Allan Poe: A Critical Biography* (New York: Cooper Square, 1969), p. 13.
- 5) *Six Penny Magazine* 誌(1863年)にあらわれた Mary Gove なる女性の回想。Quinn, pp. 507-8.
- 6) "Morella", *Works* II, p. 28; "The Fall of the House of Usher", *Works* III, p. 285; "Eleonora", *Works* IV, pp. 239, 242; "The Rationale of Verse", *Works* XIV, p. 220.
- 7) "The Poetic Principle", *Works* XIV, p. 274.
- 8) "The Rationale of Verse", *Works* XIV, p. 220.
- 9) "The Imp of Perverse", *Works* VI, p. 151.
- 10) "The Fall of the House of Usher". *Works* III, p. 283.
- 11) "The Swiss Bell-Ringers", *Collected Works of Edgar Allan Poe*, ed. Thomas Ollive Mabbott (Cambridge, Mass.: Belknap, 1978) III, p. 1119. (なおこの作品は *Works* に載録されていない。)
- 12) "The Fall of the House of Usher", *Works* III, p. 285.
- 13) "The Fall of the House of Usher", *Works* III, p. 284.
- 14) "Elenora", *Works* IV, pp. 239, 242.
- 15) "The Swiss Bell-Ringers", *Collected Works*, ed. Mabbott, III, p. 1119.
- 16) "Marginalia", *Works* XVI, p. 171.
- 17) "The Fall of the House of Usher", *Works* III, p. 283. なお以上注6~17のうち、9, 11, 15について Burton R. Pollin, *Word Index to Poe's Fiction* (New York: Gordian Press, 1982) に負う。
- 18) "It is in music, perhaps, that the soul most nearly attains the great

- end for which, when inspired by the Poetic Sentiment, it struggles—the creation of supernal beauty.” *Works* XIV, pp. 274-5.
- 19) David D. Anderson, *Sherwood Anderson: An Introduction and Interpretation* (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1967), p. 35.
 - 20) Rex Burbank, *Sherwood Anderson* (New Haven, Conn.: College & Univ. Press, 1964), p. 62.
 - 21) David D. Anderson, p. 35.
 - 22) “Here were words laid before me as the painter had laid the color pans on the table in my presence.” *A Story Teller’s Story, The Complete Works of Sherwood Anderson*, ed. Kichinosuke Ohashi (Kyoto: Rinsen Book Co., 1982) XII, p. 362.
 - 23) *Works* V, pp. 169~70. 都市名は p. 175.
 - 24) *Works* IV, pp. 134~45.
 - 25) *Winesburg, Ohio, The Complete Works* III, p. 167.
 - 26) *Ibid.*, p. 291.
 - 27) “The Thinker”, *Ibid.*, pp. 158~59.
 - 28) “Tandy”, *Ibid.*, p. 167.
 - 29) “Loneliness”, *Ibid.*, p. 206.
 - 30) “Sophistication”, *Ibid.*, p. 285.
 - 31) “Departure”, *Ibid.*, p. 299.

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)